稲作　営農情報

刈り取りに向けた準備　適期の刈り取り判断について

刈り取り時期は、出穂後日数や積算気温を参考に、枝梗や籾の黄化程度をよく観察し総合的に判断しましょう。

■判断の目安

①出穂後の日数	早　生　種（あきたこまち等）：出穂後45日頃 中 晩 生 種（めんこいな・ひとめぼれ等）：出穂後50日頃
②出穂後の積算気温	早　生　種：950～1050℃（1100℃を超えると胴割粒増加） 中 晩 生 種：1050～1150℃（1200℃を超えると胴割粒増加）
③出穂後の積算日照時間（特に日照不足年）	収量水準540kg／10ａ（全籾数28～30千粒／㎡）：190～255時間 収量水準570kg／10ａ（全籾数30～32千粒／㎡）：200～265時間 収量水準600kg／10ａ（全籾数32～34千粒／㎡）：215～280時間
④枝梗の黄化程度	主軸の上から5番目の枝梗まで黄化した頃
⑤籾の黄化程度	最終的には籾の黄化程度90％で決定

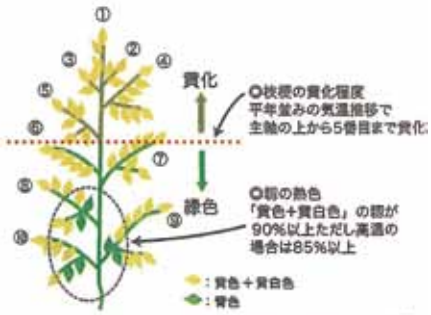

図　籾の熟色、枝梗の黄化程度による刈取り適期の判断（模式図）

○出穂期別積算気温到達予想日　（９月５日現在）

出穂期	能代アメダス				
	950℃	1000℃	1050℃	1100℃	1150℃
８月１日	９月10日	９月12日	９月15日	９月17日	９月20日
８月５日	９月15日	９月17日	９月20日	９月24日	９月27日
８月10日	９月21日	９月23日	９月27日	９月30日	10月３日
８月15日	９月28日	９月30日	10月４日	10月７日	10月10日

※９月３日以降は、平年値を使用

■収穫・乾燥・調製作業の留意点

○収穫時の籾水分は25％以下が望ましいため、作業時間帯は稲体が乾燥している午前10時～午後５時頃に設定しましょう。

○高水分の籾や活青米の多い籾等は、籾含水率20～18％まで低下した時点で乾燥機を休止し、籾全体のテンパリングを行ってから仕上げ乾燥する二段乾燥を実施しましょう。

○米選機の網目は1.9㎜を基準とし、整粒歩合80％以上の高品質米をめざしましょう。

ストップ！　農作業事故

コンバイン収穫作業の事故事例と対策

【事例１】コンバインでの刈り取り終了後、手刈り稲を扱胴（こぎどう）入り口から脱穀機に投入していた。作業衣の袖がフィードチェーンに引っ掛かり、前腕部が巻き込まれ、手掌（しゅしょう）部を複雑骨折した。袖口のボタンを留めていなかったので巻き込まれたようだ。

対策……最近のコンバインは全面刈り取りが可能になってきていますが、圃（ほ）場の形状や進入口部分では手刈りをし、最後に手こぎをすることがあります。手こぎは、まず、平たん地で行います。走行クラッチの中立を確認し、駐車ブレーキをかけ、刈り取りヘッダーを地面まで下ろします。手刈りした稲を脱穀部の投入口から供給します。稲は結束せずまたは結束ひもを外して投入します。その際に右手が供給部に近づき過ぎると袖口や軍手が巻き込まれる恐れがあります。供給口の近くには「緊急停止ボタン」がありますので、いざというときにはそのボタンを押して動力を遮断します。フィードチェーンのロックを外して、腕や手を引き出すことができます。シーズン前に停止操作を練習しておきましょう。また、作業者の背が低い場合には、無理な姿勢で供給せず、幅のある踏み台などを利用して高さを合わせましょう。いずれの場合も軍手は使わないことが原則です。

【事例２】倒伏稲を刈っていたところ、搬送部に稲が詰まった。動力を遮断して詰まりを取り除き、作業再開のため、若干後退発進したところ、後方でわら処理をしていた補助者にぶつかり転倒させてしまった。悲鳴が聞こえたのですぐ停止して、ひかずに済んだ。

対策……コンバインは大型になるほど死角が増え、特に後方は確認が困難になります。エンジン始動時や作業再開のときはブザーを鳴らし、一呼吸置いて補助者が安全な位置に移動したことを確認してからスタートさせましょう。バックモニターの設置も有効です。補助者は機械との距離を十分に開けて作業しましょう。

来月のあなたの運勢（2019年10月）

牡羊座（3・21～4・19）　周囲に振り回されやすい期間。やたらと考えを変えず、貫く意志を大切に。気晴らしには美術館巡りが最適